

## 乾武俊『能面以前 その基層への往還』（私家版、2012年）

仮面・芸能・被差別民の詩学

友常 勉

1

2012年5月18日に大阪府高石市で開かれた著者の卒寿・出版記念会にあわせて本書は刊行された。被差別部落の民俗伝承と仮面研究に大きな足跡を残してきた著者の、「最終著書」と後書きに書かれた本である。

本書には、『能面以前』のタイトルが示すとおり、〈能〉以前の芸能、とりわけ田楽に比重が置かれた考察やフィールドワークと、近年の摩多羅神研究に触発された論考、そして「翁」に対置される「女面」をめぐる得られた著者の新たな知見、特に「福め」の発見——著者自ら「私の仮面研究の最晩年の成果」と認めるところの——にかかわる論考が収載されている。

今もその魅力を保ち、なおかつ被差別民と芸能との関係——すなわちそれは中世被差別民の起源にかかわる——を論じるうえで最大の道標のひとつである『黒い翁 民間仮面のフォークロア』（解放出版社）を著者が上梓したのが1999年。その後も著者の営みは続けられ、本書に収められた田楽や延年、各地の御田祭礼おんだの採訪、説経『をぐり』をめぐる聴き取り調査が果たされた。

〈能面以前〉というタイトルには、被差別の系譜から切り離され、外来系の面や芸能との葛藤や、そこから変容を遂げた芸能の本質を問わない能楽・芸能研究、そして仮面研究への根底的な問題提起が込められている。だが筆者は、安直な「芸能の起源＝被差別民」説を実証的に斥けることと同時に、芸能の起源と被差別（民）

との本質的な関係を深化させようとしない芸能史・部落史の実証的な研究状況をも撃つ。史学と詩学のこの両義的なポジションを、著者の個人史とかかわらせて急迫性と根源性をもって表現したのが、『黒い翁』が到達した地点であった。その意味で本書『能面以前』は『黒い翁』の延長線上にある。

著者が抱えているマグマのようなそうした部分は、しかし、『黒い翁』でも、そして本書でも前面にあらわれているわけではない。むしろ私家版『能面以前』は、断片的な考察・思索・直感が自由連想的につながっており、戦前に能勢朝次に師事したエピソードが挿入されたりすることで、古き良き学風を漂わせて、滋味と風流にあふれたものだ。その境位にあって、著者は数多あまたの仮面に囲まれ、仮面が発する〈声〉を聞き、あるいはそれらにうなされている。著者はそうして異界と此界の境界に佇んでいる。

著者には、1942年に書かれ、のちに第一詩集『面』（東門書房、1952年）に収められた「面」という作品がある。これは先の卒寿・出版記念会でも配布されたと聞く。紹介しよう。

面

その面を売ってくれませんか。

私は今夜、短かかった青春を捨て、私の故郷へ帰るのです。その面を売ってくれませんか。

著者のライフワークである仮面は、著者の人

生の岐路にたびたび現れることになるが、それは異界と此界をつなぐ橋である。この直観によって著者は、職能としての、労働行為としての皮剥や、被差別民や芸能民、ハンセン病者が通った小栗街道に、異界と此界がまじわる深淵をみていく。そもそも学業の途中で故郷に帰らざるをえないその時に面に出会った著者が、異界と此界の境界線上にいて、異界から誘われていたのだ。だが、これ以上、個人史的な内面に立ち入ることは避けて、本論である乾武俊の仮面の史学＝詩学を紹介していきたい。

## 2

『黒い翁』が達成した乾武俊の仮面研究の枠組みをまず確認しておきたい。

仮面と芸能の起源にかかわって、著者は能勢朝次の「翁」論を継承していた。著者は能「翁」が天下泰平・国土安穩を祈願し、後半の三番叟において農耕の豊穡を祝祷する芸能であるという通説に対して、「『翁』が、とくに『黒い翁』が、豊作のみを祈るものなどではさらさらないと述べる。そして能勢の研究を継承して、「翁」の発生に「呪師走り」がかかわることを重視した（『黒い翁』120頁）。

東大寺や薬師寺の修二会に現在も伝承している呪師走り（呪師走り）は、最澄によって中国からもたらされたといわれ、国家鎮護のため、国全体を結界して露払いする呪法である。これまで神事芸能の起源のひとつとして多くの考察が重ねられてきた。この呪師走りについて、かつて能勢朝次は「わがくに固有の発生である」として、密教の呪法は法呪師が分担し、その「外想」を散所法師や猿楽者が受け持ったと考えた。「法呪師の行ふのは古密教的な呪術である。かやうな宗教秘密の行は、猿楽者流のよくつとめ得べきものでもなく、又賤民たる猿楽法師等に

行はしむべきものでもない。猿楽の行ふものは、其の外想である。呪術の威力内容を、一般人間の耳目に見得るやうな客観的な姿や伎で以て、象徴的外面的に表示したるものである」（能勢『猿楽源流考』岩波書店1938年、131頁）。

とはいえ著者は呪法の外想＝象徴的外面的表示から呪師猿楽が展開したという能勢のこの視点にとどまっていなかった。むしろ「外想」を荷う」とはいったいどういうことかという論点を深化させたのである。そして「キヨメの面」を参照し、それが表現している「卑しくもわびしい、…福々しくこころ和ませる造型」に注目し、そこに「翁面」を見出したのであった（『黒い翁』125頁）。「外想」を荷い、民間祭礼の祭礼行列の露払いを荷うこととは、実際に霊を鎮め、魔を祓うことである。それは那智田楽の「シテン」に共通し、能「翁」の「千歳」役、上鴨川住吉神社の「万歳楽」の黒面の役割に重なる。こうして、著者は、能勢の芸能論、とりわけ賤民猿楽論の視角に学びながら、それを芸能と被差別の起源的な関係および民間祭礼の造型へと敷衍し、その論証の決定的な結節点に仮面を据えるという方法論をとってきたのである。ここで発揮されているのは仮面の詩学である。

さらに同様の観点から、折口信夫の「もどき」「もどき面」「うそふき面」論が参照される。「平安時代、通説の〈仮面史〉では、日本固有の民間仮面はない。外来の伎楽・舞楽の仮面だけがあって、室町の時代（せいぜいが鎌倉・南北朝期）にいたって、〈能面〉〈狂言面〉（あるいはその前身）が突如現れる。また、宮廷・貴族の〈神楽〉には仮面は用いず、神楽に仮面が現れるのは近世に入って、突如民間に〈里神楽〉が現れてからである。これに対し、折口は平安時代に、日本固有の〈もどき面〉の存在を考えたのである」（『黒い翁』136頁）。

「もどき」「うそふき」へと降りていく視座は、

折口の「日本文学における一つの象徴」(『折口信夫全集』第17巻、中央公論社、1967年)を引用しながら、異界と此界でおこなわれる心意のなかの対話の洞察へと深化されていく。

「うそふき(後のしほふき)面」は「もどき面」である。これと「鬼」とは、田楽とは関係の深いものであった。／「うそふく」のは、「物を言ふ者としてのしるし」(中略)であり、「うそふき面」は「もの言う約束をもった面」である。「主たる神に対してもどく精霊の表出」であり、「芸能の種類が古ければ古いほど、このもどき面の跳梁ぶりは激しくもあり、また必然な感じを起させられ」た。／しかし、(主たる)「神の威力ある語」に対して、(精霊が)「口を開けば、ただちに神語に圧せられて、たちまち服従を誓う詞章をのべなければならぬ」時、「もの言わば奉仕を誓うことになる。不逞の輩は、こうして、かたくなに口を緘しとおそうとした」。「もの言う約束をもった面」と「かたくなに口を緘した面」、「沈黙と饒舌」の両義性が「うそふき面」の表情を生んだ。(『黒い翁』136～137頁)

「もどく」ことから「うそふく」ことへの葛藤の底流には抵抗がある。天皇の前に出て賀詞を奏し、歌曲を奏する「言吹」が「嘘吹」になり、それが「身過ぎ」にもなる。こうした複雑な葛藤を沈殿している言葉について、「仲間にはわかって、相手にはわからないことば。わからないが相手を刺していることば。そのことばで相手の〈祝福〉をいうことが、このくにの芸能の発生であった」という解釈まで、著者は私たちを連れていく(同上、138頁)。そして著者は佐渡の春駒の詞章にもこのことを読み取るのである。被差別の芸能民の心性に光をあてた洞

察として、著者のこの探求を私たちは記憶にとどめておかなければならない。

さらに忘れてはならないことは、この「うそふき」の緘した口が向かっているのが、地霊に他ならないことを、著者が言い当てていたことである。「中世民衆史の中心は、〈地霊〉といかに合一し、天なる〈王権〉をのりこえるか、という課題である」(同上、174頁)。能『道成寺』の「女」(安珍清姫伝説の清姫)は鐘を地面に引きおろし、その中に「鐘入り」する。これに触れて、「〈道成寺〉の鐘は、巨大な〈仮面〉である」と著者は喝破した(176頁)。「〈鐘〉は怨霊の仮面群を、そのうちに隠しもつ巨大な〈仮面〉である」(同上)。「鐘」を通して、「女」は地霊と交信し、地霊そのものとしての蛇に変身する。「〈仮面〉は怨霊や地霊を呼び込む。さらにそれを着けることで人間は此界から異界をまたいで精霊に変容する。そして精霊たちにしかわからない言葉で話し、災いをなす精霊たちや魔を露払いし、神々を祝福する。『黒い翁』において、乾武俊はこの多様に両義的な性格をもつ仮面の本質を剔抉した。そして日本中世の芸能民と被差別民の研究史に、仮面という回路を開いたのである。逆に言えば、文化装置としての〈仮面〉という媒介を据えることではじめて、芸能民と被差別民の世界は、常に本来的に異界・他界の神々と背中合わせであることが意識されるのである。それはケガレやキヨメという概念をその外延と内延の区別において、正確に理解するための条件である。

### 3

山路興造がいうように、芸能と被差別民との関係は自明ではない。「被差別民の歴史を考察する研究者の間では、中世・近世を通して専門の芸能者を被差別民であったとする見解があ

る。芸能が本質的に持つ特性の一つを〈咒能〉と考えると、この能力を持つゆえに、專業芸能民は差別され、賤視されていたとするのである。／しかし芸能は、本質的に呪術性を持ったものと言えるのであろうか。また、專業の芸能者は、芸能を專業とするという理由で、中世・近世を通じて本当に賤視されていたのであろうか」(山路『翁の座 芸能民たちの中世』平凡社、1990年、41頁)。

この根底的な疑義にもとづいて、山路は「咒能から芸能へ」「宗教から芸能へ」という〈発展史〉を仔細に検討した。それによって、呪術性とかかわりがない外来系芸能が民俗的芸能と結びついていったこと、免田などで保護された「国の芸能」の存在、專業化していく「道々遊者」「道々の者」と、素人的な模倣からはじまった、被差別芸能民も含めた「手の芸能」などを概念化した。さらにその上で咒能としての被差別芸能民の条件が改めて定義された。そのモデルとなるのは、丹生谷哲一が紹介した、醍醐寺所属の散所の所役としてのキヨメ役を有し、同時に芸態としての千秋萬歳に携わった被差別芸能民であろう(丹生谷哲一『検非違使——中世のけがれと権力』平凡社選書、1986年所収)。丹生谷哲一が紹介した『醍醐雜事記』に従って、具体的なキヨメ役をあげれば、障泥(皮製馬具)上納、掃除、緒太草履上納、千秋萬歳、庭作りなどになる。これに葬送を付け加えれば、史料上、キヨメでありかつ同時に芸能民でもある被差別民の条件を考えることが可能となる。実際、山路興造は次のように結論している。「正月など決まった季節に現れて、言霊の靈力によって精神のキヨメを行う芸能は、本来キヨメを職能とした者たちによる季節的芸能であって、專業芸能者の行う芸能とは区別して考えるべきものであったはずである。／これら季節的祝福芸能を演じる芸能者がのちのちまで賤視されるの

は、彼らが根本においてキヨメであったためである」(山路『翁の座』46～47頁)。こうして山路興造は、戦前の能勢朝次の賤民猿楽論、喜田貞吉「大和における唱門師の研究」の唱門師・夙・猿楽論(『喜田貞吉著作集』第10巻、平凡社、1982年)、そして盛田嘉徳『中世賤民と雑芸能の研究』(雄山閣出版、1974年)の散所論・河原者論など、被差別民と芸能に関する先学の研究が不十分なままにしてきた、キヨメと芸能、芸能民における專業的芸能民と被差別芸能民などを区別し再構成するための要件を提起した。少なくともキヨメと被差別芸能民の関係について、その概念の内延は、この要件を踏まえる必要がある。

だが、現在、山路興造『翁の座』以降にかぎっても、国家鎮護のための神事における咒師の実態から、各地の修正会、民間神事における芸能と咒法とのかかわり、魔多羅神をめぐる研究などにおいて、数多くの研究成果・史資料が蓄積された結果、再び、キヨメと芸能、專業的芸能民と被差別芸能民との関係を再構成する必要性が生まれている<sup>(1)</sup>。何よりも、研究の進展によって、それらの概念の外延が変化しているのである。そして、2000年代の後半に集中して採訪され、思索された乾武俊の仮面論・芸能論としての『能面以前』が位置しているのは、そうした今日的な研究上の文脈でもある。むしろ著者は現在の研究状況への意識的な介入を企てたといったほうがいいたろう。

#### 4

冒頭に紹介したように、『能面以前』は、第一部「〈翁面〉をめぐる」において、天野神社の「御田」、上鴨川住吉社の「万歳楽」、撰津法成寺と「シク」、そして杭全神社の「御田」などが検討される。田舞・田楽については新井

恒易『農と田遊びの研究』上下（明治書院1981年）という浩瀚な先学がある。著者も基本的に新井の研究に依拠しているが、目指されているのは『黒い翁』が提起した諸論点の深化である。

天田社「御田」の祭礼では祭儀は田人が主導するが、芸能は牛飼いが主導すること、そして黒面の牛飼いによる「もどき」があることなどが示唆され、「翁」に先行する古態の芸態と〈牛〉の象徴的な位置が示される。さらに、「田仕事」のこたばを述べながら、前段で疫癘<sup>えきれい</sup>と災厄を祓い、祝禱・予祝へと転換していく唱えごとの構造、またあるいは、「白い翁」（＝白式尉<sup>はくしきじょう</sup>）に先行する黒い翁（＝黒式尉<sup>こくしきじょう</sup>）、「もどかれるもの」に先行し、予祝し、それを先取りし、還流する「もどき」の、起源を自己創出するような構造が提示される。撰津の夙猿楽をめぐっては、史料を辿るフィールドワークを通して、著者はそこにいたかもしれない被差別民・芸能民たちを幻視する。

住吉社に関しては、『勸仲記』弘安7年(1284)の条が記す「住吉社第二神殿北荒垣内楠木本五体不具穢在之」と、同時期の賀茂社・住吉社の田植神事の記録や翁面三座の猿楽の記録とのあいだの見えないつながりへと連想が飛ぶ。ケガレと田植神事・猿楽が隣接していたことを示唆するだけでなく、そのとき神事を荷った呪師の「禄物」の衣へ、翁面の顔へと、著者は読者の想像を誘う。被差別民と芸能民たちの実存がそこに現れる。それは史料の読み方をも変える。楠の元にあえて居座っていた「五体不具」の意志と具体的な姿に私たちは近づくのである。

第二部「女面をめぐって」の中心をなす「杉野原の御田」の「福女踊」では、その詞章の中では呼びかけられても、そこに存在しない「福女」が著者の問題となる。しかし「そこにいない〈福女〉が仮面である」と著者は書く。そして、自らが所蔵する仮面を参照し、「福め」は「福

奴」でもあり、「黒尉」でもありえただろうと推定する。それは「他界の者」なのである。詞章においても「ふくめよ」から「福女」と転位する。主客の転位と、それをつなぐ仮面の効果が確認される。そして論点は著者所蔵の「享禄三年」の「女面」、そしてそれが誘う毛越寺<sup>もうつうじ</sup>の延年と、そこで摩多羅神の前で舞われる「若女」「老女」の舞から、「黒い媼面」へと推移していく。「黒い翁」に対置される「黒い媼」の存在がこうして本書後半に至って前面化してくる。〈能面以前〉を目指す著者の仮面論・芸能論は次のステージに移行しているのである。それは仮面・被差別・芸能にかかわるより普遍的な視座に向かっている。

飛躍を覚悟でいえば、これまでの芸能史・被差別民史において、「翁」の前景化につれて後景化していった「媼」は、吉本隆明が『共同幻想論』の対幻想の段階で論じた「巫女」の位置に等しい。吉本隆明にもとづけば、巫女は共同体の関係の内側と外側の両側において存在している。しかもその「関係」そのものを性的な対象＝対幻想の対象とするのであった。それによって、巫女は〈家〉〈共同体〉の論理そのものと同化する。家や共同体の共同幻想を形成し、しかしそれを国家へと昇華せず、性的な関係を持ちつつ同化する。この議論を御田祭礼の「福女」になぞらえるならば、「そこにいない」「他界の者」であることによって、「福女」は「福奴」（男）—「福女」（女）の転位、「もどき」—「シテ」の転位を促す媒介である。この転位とは、共同体がその〈外部〉との関係を対象化することとっていい。共同体にとって〈外部〉とは荒ぶる、畏怖されるべき力を持っているが、巫女的存在としての「福女」は、その〈外部〉との関係そのものを性愛の対象とすることで、〈外部〉の持つ、荒ぶる、畏怖されるべき力を無化する。巫女は共同体の外部を畏怖しない存在な

のである。いわば、共同体の境界領域に位置する職能民や被差別民と同様の異能を巫女は有する。しかし巫女自身がひとつの力であるがゆえに、共同体はただちにその力を抑圧する。「黒い翁」と「黒い媼」の関係にはこうした観念史における闘争の痕跡が残されているのではないだろうか。

なお、2012年5月10日、摩多羅神の坐像の発見で注目を集めた出雲の清水寺において、修築に伴い、改めて本堂東北隅に奉安された摩多羅神坐像を祝って、「媼舞」が奉納された。山本

ひろ子の発案によるが、その「媼舞」は、著者・乾武俊が毛越寺延年の「老女舞」を手本に創作したものであった。

他界・異界の存在を実際に体験すること＝身体化すること。そこで見せること・見えることを学の基軸に据えること。そうした体感を著者は私たちに迫る。そして、被差別と芸能との関係を実存的に読み、構成することを私たちに要求する。私たちの研究が詩学でもあることの難しさと幸福を、残されている多くの課題とともに、乾武俊は教えてくれる。

#### 註

(1)とりわけここでは咒師についての研究を念頭に置いている。大東敬明「真福寺大須文庫所蔵『中堂咒師作法』考」(『芸能史研究』192号、2011年1月)を参照。なお修正会と摩多羅神をめぐっては、服部幸雄『宿神論——日本芸能民信仰の研究』(岩波書店、2009年)、さらに山本ひろ子の以下の論考を参考にされたい。

『異神——中世日本の秘教的世界』上(ちくま学芸文庫、2003年〔親本は平凡社、1998年〕)、同「摩多羅神紀行、あるいは服部幸雄『宿神論』の彼方へ」(『文学』10巻4号、2009年7月)、「出雲の摩多羅神紀行(前篇)遥かなる中世へ」(『文学』11巻4号、2010年7月)、「出雲の摩多羅神紀行(後篇)黒いスサノオ」(『文学』11巻5号、2010年9月)。